

Our World Today:
Reflections from
American Thinkers

Nur Yalman/Harvey Cox/Fathali Moghaddam/David Hansen
Larry Rasmussen/Hazel Henderson/William J. Reckmeyer/Lou Marinoff
Mihaly Csikszentmihalyi/John Cobb/Kenneth Price/Jim Garrison
Larry Hickman/Frances Moore Lappé/Donna Hicks/Elaine Fuchs/Stephen Bergman
Janet Surrey/Sarah Wider/Nel Noddings/Mary Catherine Bateson

横田政夫
[インタビュー・編]

アメリカの 知性は何を 考えているか

テロ、反グローバリズム、格差、分断——

世界を覆う闇に 「知」で挑む!

ハーバード、スタンフォード、コロンビア……
最先端を駆ける米識者21人への珠玉のインタビュー集

講談社
定価：本体1,400円
税別

II 宗教は 対立の手段か 共生の糧か



ハービー・コックス

宗教学者、ハーバード大学名誉教授

一九二九年アメリカ生まれ。イエール大学卒業。ハーバード大学で宗教学の博士号を取得。六五年から同大学で教鞭を執り、応用神学部学部長などを歴任。宗教と社会とのかわり、キリスト教と他宗教との交流についての著大な研究があり、『世俗都市』『東洋へ』『二十一世紀における宗教改革』などの著作で世界的に知られる。

人種や民族の対立の原因は宗教にあるのでしょうか。それとも、対立をおおるための手段として宗教が利用されてしまうのでしょうか。

コックス 宗教が政治的な権力に利用されて、対立構造を生み出す役割を果たすことはあつても、宗教そのものが対立の原因とはならない、というのが私の見解です。

長い歴史を通して、人種や民族間の抗争に、つねに宗教が介在してきたことは事実であり、そこに、対立の原因は宗教にあるとの短絡的な見方が生まれてしまうのは、故なきことではありません。

しかし、日本が第二次世界大戦に走った原因は、果たして神道という宗教にあつたのでしょうか。好戦的な軍部勢力が国家神道という歪んだ宗教意識を人々の心に植えつけ、戦争の遂行に都合のよい道具として利用したことは、だれの目にも明らかでしょう。

中東においては、第一次世界大戦以来、多くの宗派をもつイスラム教が植民地政策のために徹底して利用されてきました。異なる宗派間の対立をあおり、内部分裂させて結束の力を削ぎ、外からの支配を容易にする、という常套手段が用いられたのです。

近年においても、イラクに侵攻したアメリカが撤退にあつた宗派性の強い勢力による政府の樹立を後押ししたのも、その一つです。理想的には、宗派性をもたない世俗的な政府が生まれていれば、異なる宗派の人々が新政府を受け入れやすくなり、宗派を超えた協力関係を結ぶことも、比較的容易であつたはずですが。

ところが現実には、世俗的なグループでもなく、多数派の宗教勢力でもない、少数派に実権を与えたために、国を一つにまとめることが、かえって困難になってしまったのです。まるで、新たなトラブルの火種を用意するかのように。

IS(イスラム国)のように、教条主義に陥り、他の宗教や民族に対するテロ行為に走る集団の存在が、人々の間にイスラム教に対する警戒、さらには宗教そのものに対する懸念を広げていることも事実です。

コックス それについて興味深い話があります。ISの研究に詳しいハーバード大学の同僚によれば、ISはイスラム教に正しい理解をもつ若者に対する勧誘を、あえて避けているというのです。ISの思想や行動は、いくら自らがイスラムの伝統を受け継ぐと強弁しても、正しい理解をもつ人々の眼には、それがイスラムの教えを歪んだ形で捉え、自分たちの目的のために教義を利用しているにすぎないと映るからです。

だからISがヨーロッパなどで同調者を勧誘する時、彼らはモスクに集まる敬虔な信者のところへなど行かない、というのです。むしろインターネットを駆使して、ヨーロッパでの移住生活に苦しみ、しかもイスラムの教義に暗い、中東出身の若者たちに狙いを定めるのです。

そうした勧誘に接した若者たちの中には、現実の生活における不平等や偏見に苦しみながら、人生の意味を求め、自身の存在の証しを探りつづける人々もいるでしょう。ISはそうした人々

の心の空白に入り込み、「正義に基づき、人々の称賛を得られる新しい社会を建設しよう」と、言葉巧みに誘いをかける、というのです。

その意味でいえば、ISの動向を探るためにモスクを監視したり、ISへの怒りをモスクにぶつけて破壊行為に及ぶのは、的外れな行為といえるのです。

実際、ボストンマラソンの会場で爆弾を仕掛けた犯人たちは、モスクへの出入りを差し止められていたのです。人々の説得にも応じず危険思想を捨てなかつたために、モスクから追放された者たちだったのです。

また、ISの凶行を目のあたりにした人々が、イスラム教そのものを閉鎖的な宗教と決めつける傾向があることも承知しています。しかし、歴史はスペインのアンダルシア地方において六〇〇年の長きにわたり、イスラム教徒がキリスト教徒やユダヤ教徒との間で、豊かな共生の社会を築いてきた事実をいまに伝えていきます。この史実こそ、イスラム教のみでなく宗教そのものが対立の原因としてつねに存在するものではないことを、如実に物語っているのです。

宗教性と世俗性は相反しない

経済的な価値がすべてに優先されるなど世俗化が進むなかで、かつての史実が忘れられ、宗教を無力視し、警戒さえする風潮が支配的となりました。

ISなどの極端な原理主義の動向を懸念して、だから宗教は怖い、との短絡的な拒否反応が示され、たのも、そうした風潮の反映といえるのかもしれないね。

コックス その問題を考えるうえで大切なのは「secular (世俗的)」と「secularism (世俗主義)」の二つの意味を明確に区別しておくことです。

本来、宗教性と世俗性は決して相反するものではありません。宗教とは現実の世界、すなわち世俗に生きる人々のものであり、世俗性を否定するものではないからです。この二つを対立関係に置くことが、そもそも間違いないのです。

問題はむしろ世俗主義にあるのです。世俗主義は、宗教から発生する古来の価値観を否定して、物や富などの特定の価値観こそ最上のもものと主張します。言い換えれば、宗教のドグマ(教義)性を否定しながら、世俗主義のドグマを人々に押し付けようとするのです。それによって他の多様な価値観が片隅に追いやられ、ドグマ的な宗教と同じような弊害を社会に残してしまうのです。

博士は、近著「The Market as god」(市場という神=仮訳)で、現代人が市場経済に最大の価値を置き、神のように崇めてしまっている姿に警鐘を鳴らされていますね。

コックス 市場が神に代わって人間の生活の基準を決め、価値を生み出す源となり、自身の存在の証し、すなわち自分がどれだけ価値のある人間であるかを判断する尺度となってしまうこの

とに、大きな疑問を覚えたからです。

じつはローマ法王も最近、この問題について人々に興味深い問いかけを行っています。それは次のような問いかけです。

キリスト教の福音は現代語に訳せば「グッドニュース」という意味をもつ。そのニュースを聞くことよって人々は幸福を感じ、充足を覚えることができるはずである。では、その福音を聞きながら、なぜ人々が日々の生活において失望したり意気消沈したりすることが多いのだろうか。法王の答えは、それは他の特定の宗教、あるいは世界観の影響力があまりにも強いからである。その宗教とは、消費に根差した資本主義のことである。その多大な影響のもとで人々が蓄財に腐心し、競争に明け暮れてしまっていることに原因がある、というものでした。

市場経済のシステムをすべての基準として、ものごとの価値ばかりか人間の価値をも判断するような、新たな「信仰形式」のもとに社会全体が組み込まれるようになってしまったのです。

だからといって、すべての人が市場信仰の恩恵にあずかれるわけではありません。逆に、経済の格差は広がるばかりで、その恩恵に浴^くせない人々の数は増大の一途を辿っているのです。既成の信仰を捨てぬままに、市場経済という新たな信仰の徒ともなってしまう人々が、福音を聞き、あるいは信じながら、なお不幸を感じつつづける矛盾の原因がそこにあるのです。

危機の時代にこそ宗教は進化する

市場経済に偏した社会の価値観からの脱却の一つの方法として「to have」から「to be」への目覚めを呼びかける声が高まっています。市場経済の価値観の基軸である「何を、どれだけ持っているか (to have)」ではなく、「どのように生きているか (to be)」に、人間本来の価値を置くべきである、との主張です。では、人間が人間として生きるために不可欠な条件は何であると博士はお考えでしょうか。

コックス それは「Sense of wonder」すなわち、畏敬の念であり、不思議に感動し、不思議を愛でることのできる心根であると考えます。それなくしてどこに人間性の健全な源を求めることができでしょうか。宗教を真に宗教たらしめる要件も、まさにこの一点にあると思うのです。

この「Sense of wonder」について、興味深いエピソードがあります。ハーバードの科学者である同僚と会話した時のことです。私は彼に、仕事を通して感動した体験について尋ねました。生命の構造について研究する彼には、その複合的で神秘的とさえいえる働きに感動した体験が何度もあるだろうと思つたからです。案の定、彼は「もちろんだよ」と答えました。

では、その感動が科学の研究に何か良い影響を与えたか、それが研究を促進する力となったことがあるか、と尋ねたら、彼の答えは意外にも「ノー」でした。科学と、驚きの心は、まったく別物だということです。

それでも、驚きの心が科学の発展に寄与するであろう、との私の信念は揺らぐことはありませんでした。古来、科学はそうした心を大切にしつつづけて発展してきたからです。彼は、科学の合理性を意識するあまり、宗教性、あるいは精神性にもつながる驚きの心を、研究の客観性を危うくする要因と考え、あえて排除しようとしたのかもかもしれません。

経済第一主義ばかりか、科学的な合理性が偏重されがちな世相のなかで、人間本来の価値観が無視され、疎外されるとしたら、それは憂慮すべきことですね。ところで博士は、思想や宗教の進化や変革は、つねに辺境や底辺から起こされてきたと主張されています。とすれば、経済や科学によって辺境に追いやられ、底辺に置かれているように見える宗教も、いま、進化と変革のチャンスの時を迎えているといえないでしょうか。

コックス 進化は必ず起きるはずですが、古来、宗教は時代の危機のなかで生まれ、危機を乗り越える力となつてきたからです。宗教の危機の時代であるからこそ、既成の宗教の概念を超えた新たな宗教の台頭が期待されるのです。

古来、キリスト教にしろ仏教にしろ、新しい宗教は何もないところに突然、発生したわけではありません。歴史の文脈に育まれ、時代の変化に対応すべく形を変え、台頭してきたのです。

たとえばイエスの存在は、ユダヤの歴史を踏まえずして語り、理解することはできません。彼の思想はユダヤの伝統と文化を揺籃として生まれたのです。その伝統の限界を知り、改革に立つ

たのであり、伝統からまったく離れたところに生まれたものでもなく、伝統を放棄するものでもなかったのです。

ただし、その伝統の改革が、ユダヤの教典に戻ることによつてではなく、ユダヤの精神そのものに深く降り立つことを通じて試みられたものであったことも忘れてはならないでしょう。

同じく、釈尊その人もインドの伝統に生きながら、その改革の道を歩みつづけた覚者であつたと私はみております。

さらに、イエスは民族の中心都市ではなく、そこから遠く離れた名もなき小さな村に生まれしました。王宮に生まれた釈尊も、そこを出て人里から離れた辺境で思索を深めました。宗教と精神の変革に立つた預言者たちの多くは、都会など文化の中核部ではなく、辺境において行動を起しているのです。

その理由の一つは、周辺や底辺にいてこそ、逆にものごとの全体像が見え、大都市から疎外された人々の苦しみや願いを肌で感じることができからです。

その意味でも興味深いのは、辺境から新たな宗教の変革に立つたイエスが、とりわけ漁師を弟子として選び、育てたことです。漁師は都会から離れた辺境に移住していたばかりでなく、つねに危険と隣り合わせの海と対峙しながら、気象の急変などの不測の事態に機敏きびんに対応できる知恵を日々、磨いてきたからです。そうした生きた知恵と力を備えた人々こそが、新たな思想や宗教の興隆に不可欠な人材となるのです。

伝統と現代化の正しいバランスは

宗教を含めた伝統思想は、時代の変化に対応する知恵を磨くことを怠れば、過去の遺物と化しかねません。その対応を怠れば、伝統精神の核心を見失う恐れもあります。伝統と現代化のバランスを正しく保つためにいま、宗教にはどのような挑戦が求められるとお考えでしょうか。

コックス 宗教が教条主義に陥り、過去の遺物まねがとなることを免れるために大切なのは、その宗教の教典や文献が、いつ、だれによつて書かれたものであるか、だれに対して説かれ、語られたものであるかを、正確に押さえておくことです。それを通して、教えがどのような歴史や時代背景のなかで説かれたかについて生きた理解を結ぶことです。

その精査を通してはじめて、教義の奥に流れる普遍の英知を開かれた眼で汲み取ることができるとです。それを行わず、歴史からも時代からも隔絶した、死した教義に固執こじししてしまえば、変化し発展する社会から取り残されるところか、対立と混乱の温床さえ用意することになってしまうのです。

博士は、『The Future of Faith』(信仰の未来、二〇〇九年出版)によつて宗教の未来を展望されました。そのタイトルを「宗教の未来」ではなく「信仰の未来」とされた意味はどこにあったのでしょうか。

コックス「宗教」という言葉は、特定の宗教組織、特定の教義形態という閉鎖的なイメージを人々に与えがちです。一方「信仰」という言葉には、宗教を含めた幅広い精神性のイメージがあります。自分は宗教的な人間ではないが精神的な人間であると多くの人が考えはじめているのは、その一つの証左といえます。実際、いま人類の精神史は「宗教性」から「精神性」へと流れを変えようとしているともいえるのです。

ちなみに、信仰（フエイス）の語源はラテン語の「フイデー」にあります。何かに献身し、何かに忠誠を尽くす、との意味を持つ言葉です。残念なことにその概念は国家への忠誠心として悪用されるなど、多くの悲劇を歴史に刻んできました。

私たちは、もう一度、この言葉に、国家や特定の宗教による制約を超えた普遍の意味を甦らせ、人類そのものに対する献身を促す知恵として輝かせてゆかねばならないでしょう。

さらに、人間のみならず、生きとし生ける、すべての生命に対する誠意と献身の心の源となる、普遍の信仰心を高めてゆかねばならないでしょう。

すべての宗教はいまこそ、その英知を結集して、人類の共生、人間と自然の共生のための貢献に立つべき時なのです。そこにこそ「宗教の未来」も開かれてゆくと私は考えるのです。

III

多文化主義 から 普遍的文化主義へ



ファザリ・モガダム

心理学者、ジョージタウン大学教授

一九五二年イラン生まれ。英国のリバプール大学卒業。同国のサリー大学で修士号と博士号を取得。カナダのマツギル大学を経て、九〇年から米国のジョージタウン大学へ。現在、同大学の心理学部教授。アメリカ心理学会が発行する季刊誌「平和と紛争、平和心理学ジャーナル」の編集長を務める。平和と共生のための普遍的文化主義の樹立を説き、注目を集める。